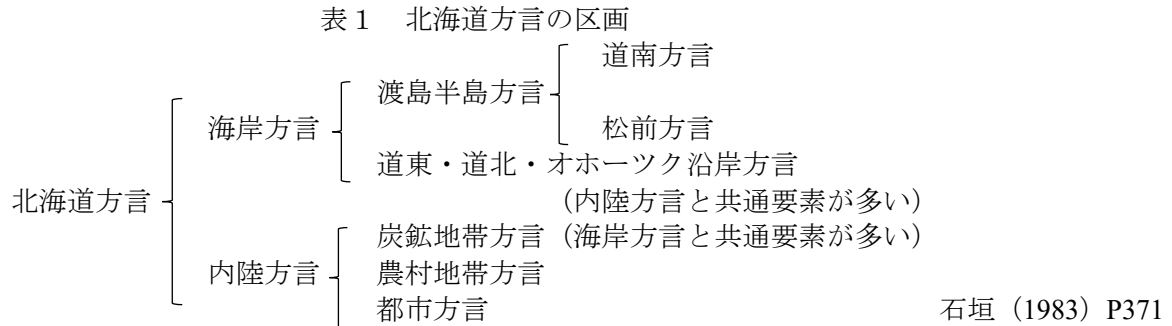


北海道海岸方言の成立過程に関する一考察

大鐘 秀峰

1 はじめに

北海道方言の区画は、大きく海岸方言と内陸方言に区分されるのが通説であり、石垣（1983）はさらに下位分類を含めて次のように北海道方言の全体を整理している。



これらの区画の成立について、石垣（1983）は「北海道方言の成立」において海岸方言と内陸方言の成立過程とともに、区画の前提となる「北海道方言の地域差」の観点からそれぞれの区分の下位区分について解説を加えている。

本稿では、方言区画の一般論について検討することはしない。あくまで具体的な区画について検証することを目的とする。ただし、方言区画は固定的なものではなく、ある時点の言語体系の実態という根拠を持ちつつも、言語は常に変化するという特質を踏まえるとどのような地域の言語体系の区画も個々の言語現象の共通する公約数的な集積からの画定であり、必ずしも普遍的なものとはいえない面がある。

本稿ではそのような区画の必然性を踏まえて、ある時期の言語体系の画定の結果としての区画の表面には表れてこない細かな事象に着目することによって区画成立の深層に迫ってみる。

具体的には、北海道の海岸方言と内陸方言の二大区分を前提とする。後者については、すでに内陸方言の地域差に基づく共通語成立の過程という観点から大きな調査がなされ、その形成過程が明らかにされている^{*1}のに対して、全道の海岸部に広く分布する海岸方言については、その成立の過程は必ずしも明らかにされていない。

そこで本稿では、北海道の海岸方言に焦点を当てて、区画の成立過程の地域差を浮かび上がらせることを目的にして石垣の区画を考察の対象とする。具体的な設定課題の一つ目は、石垣（1983）における海岸方言の区画の要素となっている、渡島半島方言、道南方言、松前方言、江差弁、函館弁の各方言の成立過程を明らかにする。二つ目の課題として図1のように分布しているとされる北海道海岸方言の分布を形成したとする伝播の様態について明らかにする。つまり、伝播の様態を時間的に遡及することで、渡島半島方言、道南方言、松前方言、江差弁、函館弁、それぞれの成立過程を確かなものにすることができると考える。

考察の方法としては、方言の言語共同体を想定し、その言語共同体がどのように形成されたのかを明らかにすることになるが、そこでは集団を形成した人の流れを捉えることが不可欠になる。したがって、これらの地域の人の流れや居住の歴史を追求することになるため、当然的な考察になるので文献研究という形態を取るようになる。本稿での課題の考察についてもそのような方法を取ることにする。

2 北海道海岸方言の区画についての石垣の解説

2.1 石垣の解説の要点

石垣（1983）「二 北海道方言の地域差」（P368～P371）の記述から石垣の考察の要点は次のようにまとめることができる。

- ①青森県下北方言の影響を強く受けている下海岸が海岸方言の最も強い地域である^{*2}。
- ②江戸時代中期の道南の中心地として、松前、函館、江差の三地点があり、それぞれの共通語化が進んだ。

- ③江戸時代末期から明治期にかけて渡道者の急増に伴い、日本海を北上する人の動きと太平洋側を東進する人の動きによりさらに異種の方言に接触する機会が増えた。そこで最初の北海道共通語ともいえるべき北海道海岸方言ができていった。
- ④その中心となったのは、沿岸漁業の中心地として全道各地に物資や人を供給し、交通を発達させた函館であり、函館弁が北海道海岸方言のよい言葉として北海道の海岸に伝播した。
- ⑤函館弁を中心とする北海道海岸方言が広がるとともに松前方言、江差弁も吸収されていった。

2.2 石垣の解説から導く論点

石垣の解説では、江差弁、函館弁という表現が出てくるが、ここには、松前方言が周囲の言葉とは異なる体系としての独立性が強いものに対して、江差弁、函館弁は、方言的特質を持ちながらも体系性には乏しいという判断があったと考えられる。したがって、本稿ではその考えを受けてそれらの呼称を用いながら、前節で述べた要点を踏まえてそれぞれの特徴および成立過程と、伝播という観点から相互の関係を問題にし、前章で述べたような2点を考察の課題とする。

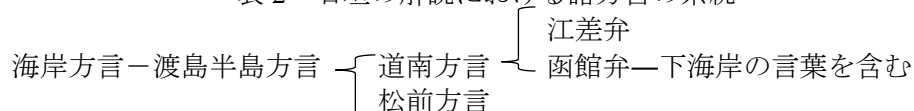
3 課題の考察

3.1 渡島半島方言、道南方言、松前方言、江差弁、函館弁の系統的整理

表1および図1を踏まえ、これらの区別された方言間の系統的関係は表2のようになる。さらに独立した方言として取り出されてはいないが、石垣の言う「海岸方言が最も強い地域」である「下海岸」の方言を道南方言の成立に関して考察の対象にしたい。この地域は函館弁を形成する基盤になったと考えられ、函館弁に大きな影響を与えたと考えられるからである。

この表2から海岸方言が最上位語であり、そこに属するより特徴のある強い海岸方言が渡島半島方言であり、さらにその中に、道南方言、松前方言、江差弁、函館弁が位置づけられる。加えて、道南地方で海岸方言が最も強いと説明された下海岸地域の言葉も函館弁に準じる方言として位置付けていいたろう。

表2 石垣の解説における諸方言の系統

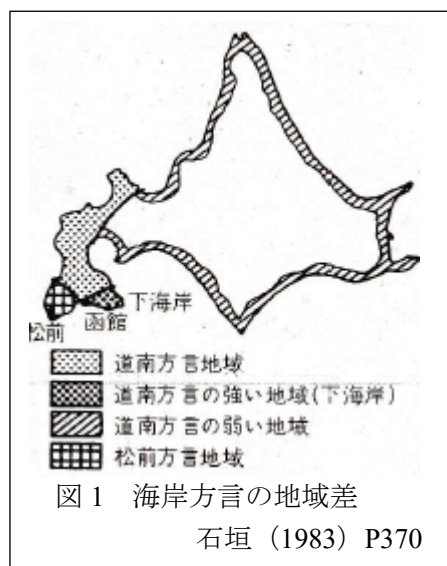


3.2 松前方言の成立過程

これらの方言の成立過程の考察には、これらの地域への和人の進出と定着といった観点が必要である。さらにそこでは海岸部における人の流れや集住を引き出した行政や漁業形態やその発展の歴史も大きく反映してくるので、可能な限りそのような観点から考察していく。

道南地域への和人の進出は、古代における渡海交易という形の漁業により始められたと考えられている。その歴史的な資料としては、縄文時代前期から中期における津軽海峡の両側に繁栄した円筒土器文化に求められるという。そこでは、対岸である津軽半島、下北半島との丸木舟による航海上および生活上の文化的交流が活発に行われていたことが示唆されている*3。

さらに地域を限定する具体的な歴史的資料が明らかになるのは中世になってからである。図2は、14、15世紀の道南地域に分布する中世の城である館の分布図である。この時点で、これらの地域に12の館が分布するということは、ある



程度の人口を集中させる集落が形成されていたということである。

15 世紀頃から始まる本道への和人の流入は、漁業が誘因となっているだけに流動的であり、まずは出稼ぎの形で入り、それを繰り返しながら、漁業の安定化の見通しができてから定住が図られていく。これは、その後の 18 世紀以降にも及ぶ、松前、江差以北の日本海側の特徴的な定住のプロセスであり、さらに漁業発達の初期における不安定さも加わった特質を持つ段階ではそのような流動的な人の流れは必然である。

また、17 世紀以降に道南地域で鯨漁が発展する以前は河川を中心とする鮭漁が主流だったという。それが鯨漁の活況とともに人は海岸部に集まるようになった。このように鯨漁が人の流れを左右しているのであり、また、鯨漁の好凶という不安定さが沿岸を舞台にして重層的な人の流れを生み出している。

この地域における大きな変化は、17 世紀初めの松前藩の成立である。松前藩が成立することで、松前地方に多くの人とモノが集中した。また、松前藩の統治による和人地の設定については、和人の居住地を限定することで、言葉の地域的成立も促すことにつながっていく。17 世紀前半の和人地は図 3 のとおりである。これが藩制下において漁業の拡大、北上化や東進化に伴い、次第に拡張され蝦夷地を侵食していくことになる^{*4}。

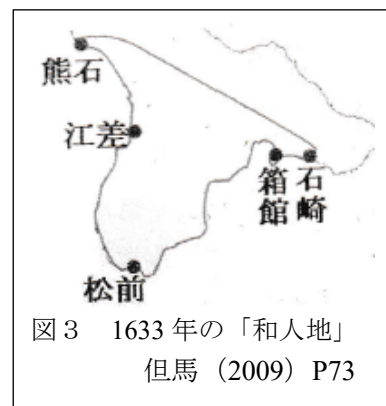


図3 1633 年の「和人地」
但馬 (2009) P73

藩制が敷かれた松前を中心とした集落は統合性を高め、松前方言を成立させていく。藩という全国のかつ行政的に位置づけられた松前は、江差や函館とは異なる政治、経済的、文化的影響をこうむることになった。その最たるものは、中央（江戸、京都）とのつながりであり、中央との人、モノのつながりは、そのまま言葉への影響を持ち込むことになる。松前では、関西方言が流入しているとされるのはその証左である。

松前方言を大きく特徴づけるのは、そのような北東北方言を中心にしながらも中央の言葉を流入させた地政学的な背景である。そのような政治的背景を持つ言語集団の形成は、この時代のみならず、それ以後も北海道のどこにも見出せない言語状況である。

また、松前藩統治時代に 18 世紀に北海道全域に場所請負制度^{*5}を開発し、普及させた（東蝦夷地 43 場所、西蝦夷地 42 場所）のも人やモノの流れを大きく左右した。それぞれの場所と松前藩を起点とする人の流れがその後の言語集団を形成していく基盤になったのである。そして、松前は全道各地と本州を結ぶ結節点としての機能を漁業と商業をとおして発揮したのである。

3.3 江差弁の成立過程

前節で述べたように渡島半島方言の起点は歴史的過程から松前の言葉であると考えられる。藩制以前にも道南には和人が居住していたが、まとまって言語集団化していったと考えられるのは松前藩成立により交通・運輸が発達し和人がまとまって渡来し始めた 17 世紀以降と考えていいだろう。

松前は政治的な中心地であったが、港湾として自然に課題があったこと、また、漁業という生業が不安定であったことが人を移動させ、それが江差を言語的にも形成していった。江差は鯨漁と木材の集積地として栄え、松前のように中央とのつながりはないが、17 世紀末の西回り海運の成立以来、日本海沿岸と北東北、さらに北陸地方との水産物を中心とする交易をとおして拡大し、それらの地方の言葉を定着させていったと考えられる。江差は藩制が終わり、明治に入ってからさらに発展し、江差弁を作り上げたと考えられる^{*6}。

そうした歴史において、鯨漁の好凶といった状況と経済的発展における水産物需要の拡大が漁業の北上化を促し、そこに発生する出稼ぎ一定住という反復的、継続的な流れを通して、北東北の言葉を核とする言葉の北上化ももたらしたのである^{*7}。その流れは、北海道の宗谷岬まで北上し、すでに成立していた宗谷場所を補強していった。そうして宗谷場所の影響はオホーツク海沿岸にも下降していく^{*8}。その基盤になったのは松前藩による各場所の先導性であり、全道的な海岸方言の成立の下敷きには場所請負制度の布石があったのである。

3.4 函館弁の成立過程と太平洋側の特質

一方、津軽海峡の中ほどに位置する函館は独自に人口を集中させていった。函館は、松前、江差地方が対岸の津軽方言を核としていたのに対して、図4の方言分布が示すように津軽海峡の中央部に位置する地形から津軽半島と下北半島の両方から人の流れを作っていた。

この下海岸には、すでに14世紀の古くから海の幸を求めて東北・下北地方から多くの和人が入稼、あるいは移住して昆布の採取を行っていたことが資料的に確認できる^{*9}。津軽海峡のいわゆる「道南六箇場所」と言われる下海岸の地域は、日本海側とは異なる発展を見せる。これらの地域は、昆布、鮭漁を中心として、対岸の下北半島と津軽半島からの漁業者を集めていく。それを束ねたのが、亀田と函館である。函館は、その良港さから人と物資を集め、商業的発展を促す起点となった。そして、それは、17世紀頃から日本海側とは異なる影響をもたらす。その背景には松前藩とは異なる江戸幕府直轄の漁業制度への政治的介入があった。つまり、そうした行政作用が人とモノの流れを形成したのである^{*10}。

それは、東蝦夷地、つまり、太平洋側への人と物の流れである。この流れは、日本海側とは漁業形態が異なる昆布漁を中心として亀田・内浦湾から東部に拡充し、日高、釧路まで広がりを見せることになった。その点では、昆布漁という地域間の共通性を生みながら各諸集落が函館と結びついた点的な関係を作り出したと言える。そこで下海岸地域は函館と太平洋側の諸集落を結ぶ、商業的な交流を生み出す中継地になったのである。

函館に集積された昆布はさらに松前を経由しながら、西回り海運によって本州へと運ばれた。このような函館の隆盛は松前にも影響を及ぼしながら函館開港後の19世紀以降も続いていく。その結果、函館を中心とした下海岸地域は集合性を強め、対岸の下北方言と津軽方言を融合させながら函館以西の松前をも含む地域の人びとをも集めていき、さらに太平洋側を東進させる人と物の流れを生み出し、伝播させていく供給地となっていったのである^{*11}。

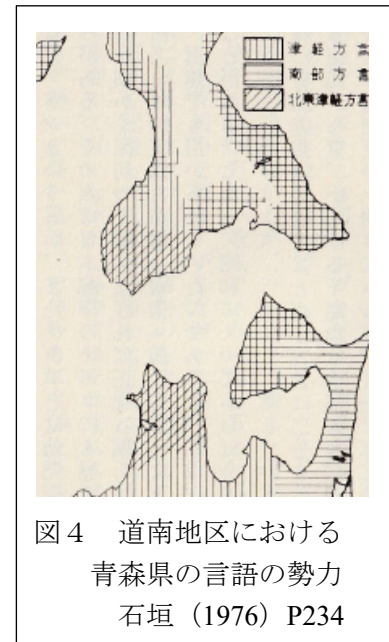


図4 道南地区における
青森県の言語の勢力
石垣（1976）P234

3.5 渡島半島方言、道南方言の成立過程

最後に渡島半島方言、道南方言の成立及び区画画定について考える。石垣（1983）には道南方言についての具体的な考察はなく、述べられているのは、「函館弁がよい言葉として海岸部に広がっていった」ということである。函館弁を全道の海岸方言の中核と考えるのであれば、松前方言、江差弁を含む地域が限定された渡島半島方言の中核も函館弁であると考えるのが妥当である。

さらに、松前方言の独自性から、函館弁、江差弁と対立する面を踏まえて、松前方言を除く函館弁を中心とする道南方言が措定されるというように段階的に区画を精密化できるであろう。

そこで道南方言は、松前方言、江差弁、函館弁を共通語化させながら、渡島半島に設定された17世紀以降の和人地に限定して形成されたと考えられよう。つまり、和人地という行政的な区域が和人の凝集性を高め、共通語化を進めていったと言える。

そして、時代的には明治以降になるのだが、日本海側であれ、太平洋側であれ、19世紀以降の全道の海岸部への和人の集住とともに濃淡を作りながらも海岸方言が伝播していったのである。

4 日本海側と太平洋側の方言伝播

4.1 日本海側と太平洋側の方言伝播の相違

上記のように日本海側と太平洋側の方言伝播の形態は異なっている。その要因は、漁業形態の相違、すなわち、日本海側は鯨漁が中心であるのに対して、太平洋側は、昆布、鮭、鰻等といった移動性のより少ない、言い換えれば地域性が強い漁業形態を取っていて、日本海側のような出稼ぎから定住に移るといった反復的・継続的かつ沿岸をなぞる人の流れを生む面が少ないということに起因する方言伝播の相違が見られるのである。

4.2 下海岸の方言性

ここで、石垣のいう、「海岸方言が最も強い地域」である下海岸について、その背景を考えたい。考えるべきことは、「海岸方言が最も強い」と石垣が言った時代の認定である。それは、明らかにこの地域が開けだした中世以降ではなく、昭和の40年代以降、つまり現代である。そして、同時代の比較の対象となった松前、江差地方も同時代と考えたい。そう考えると、石垣が調査した時代の下海岸と、松前、江差地方を比較することが可能になる。

松前地方が中央の要素を残しながらも藩政時代の勢力を失い、江差、函館にその勢力を移していった結果、人の移動や集中により道南地域の共通語化が進んだことは言うまでもなく、函館が道南の中心になっていった19世紀に及んでは、人の流れは江差から函館に移り、さらに函館弁を中心として共通語化が進められていった。その結果、江差はその方言性を弱めていくのである。

一方、下海岸地方は長い期間函館を背景として隆盛してきたが、明治以降には、東蝦夷地を発展させる起点となった昆布漁は次第に衰退し、その拠点が高知、十勝、釧根地方に移っていく。つまり、明治以降は、函館を除いて下海岸地域には商業的かつ政治的な集中や管理が及ばなくなっていたことから、共通語化をもたらす外部からの言語的影響が減少したと言えるのではない。そのため、共通語化の作用が弱く、方言性がより強く保存されていると考えられる。

5 まとめ

以上の考察から本稿での課題の考察結果をまとめる。

5.1 渡島半島方言を始めとする諸方言の特質と成立過程のまとめ

中世から見られた北東北との交易・渡海が近世になり拡大することで日本海側や中央との交流が生まれるが、基盤は津軽、南部を始めとする北東北の言葉になる。松前は17世紀初めに藩となり、政治的影響を全道にもたらし、海岸方言伝播の土台を築いた。中央の言葉の影響を受けた松前方言の独自性は強いが、より漁業を中心とした北東北の人びとの定着により江差弁が形成され、それらが函館弁とともに道南方言、さらに渡島半島方言を形成し、日本海側を北上する流れを作っていた。

一方、太平洋側は鯨漁という移動型の漁ではなく、昆布漁といういわば定住型の漁業形態を取って繁栄する。内浦湾、高知、十勝、釧根地方の漁獲は、下海岸を経由して函館に集積され、本州へのルートを築いていく。

5.2 海岸方言の日本海側北上および太平洋側東進の過程

鯨漁の盛衰に連動する出稼ぎから定住へという重層的かつ反復の流れとともに、鯨漁の凶漁や市場拡大にともなう人の北上化が方言を定着させていく人の流れを生んだ日本海側に対して、太平洋側では昆布漁主体のため海岸沿いの連続性を生む移動性は弱い。また、明治以降には、漁業だけではなく、農業による開拓も奨励され、海岸部から内陸部への移動が見られるようになる。

5.3 海岸方言の変容と分布の変容における北海道共通語化

北海道沿岸部全域における海岸方言の形成を促した背景として米による石高ではなく、水産物による貢納という北海道ならではの自然環境による要因が大きいことは特筆すべきことである。加えて松前藩による和人地の限定や場所請負制度および江戸幕府直轄による東蝦夷地における交易制度への介入といった政治的・行政的な背景も海岸方言成立の大きな要因として指摘できる。

さらに、内陸部より早くに和人の居住が始まった海岸部における日本海側と太平洋側の海岸方言の伝播、拡大過程の相違は、その後に展開する内陸部との北海道共通語の形成過程に空間的な影響を与えていることが想像できる。すなわち、連続性のある日本海側の海岸方言の強さと、いわば離散的で内陸化していった太平洋側の海岸方言とでは、北海道共通語化の態様が異なることが考えられるのである。

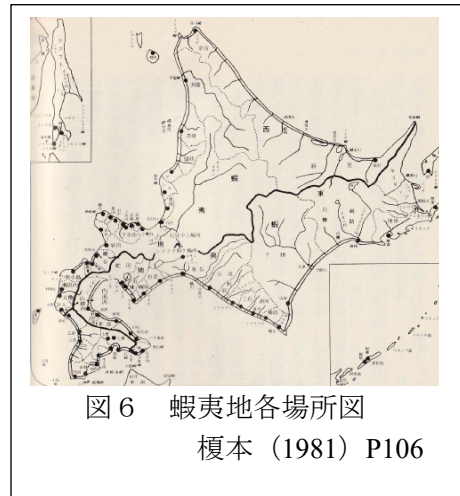
5.4 さらなる課題

石垣(1983)の区画は、本稿で考察したように通時的な解釈を引き出すものであった。しかし、それは、昭和の言語状況を捉えたものであり、本稿で考察したほぼ明治期までの言語状況からさらに内陸部への入植により共通語化が進んだ内陸方言と海岸方言との全道的共通語化が進んだ状況を踏まえたものと考えられる。つまり、方言区画という言語の体系的相違に基づく系統的整理

は、通時的な言語変化の結果であると同時に常にその後の言語変化による区画変更を予期する変化の過程にあることを意味している。海岸部と内陸部との地方共通語化と、そこにさらに全国共通語化が加わった北海道全域の共通語化の過程の解明を今後の大きな課題と考えたい。

<注>

- 1 北海道内陸方言の調査として、国立国語研究所が 1958 年に「北海道の言語の実態と共通語化の実態」を調査（国立国語研究所報告 27『共通語化の過程』－北海道における親子三代のことば（1965））のほか、団体入植地の言語変容についての小野米一（1972）「北海道の集団移住地における言語変容について－十勝豊頃町二宮農場の場合－」『日本方言研究会第一五回研究発表会発表原稿集』（日本方言研究会）を始めとする複数の研究がある。
- 2 函館以東、恵山岬にかけての亀田郡旧銭亀沢村、戸井町、尻岸内町、樺法華村の総称。石垣（1983）P368「海岸方言の最も強い地域は津軽海峡に面した下海岸といわれるところである。」とある。
- 3 大内定「考古学から見た北海道」（2003）『北海道の地名』（平凡社）（P32～P38）に北海道における石器時代からの考古学の視点からの歴史が記述されている。
- 4 松前藩制以前に安藤氏により、アイヌが居住する蝦夷地に対して、和人が居住する渡島半島南部を和入地とした。藩制後は和入地の拡大とともに松前藩の管理化が進んだ。松前藩制下の 18 世紀以降、北海道南半分を東蝦夷地、北半分を西蝦夷地と称した。左図内の「松前」と記された区域が和入地である。本文中図 3 の区域と一致する。しかし、図 3 の 17 世紀初めにおける和入地が次第に鯨を追って北上する追鯨などの漁業の拡大により、図 1 に見られるように東は内浦湾、西は、積丹半島を回って余市、小樽辺りまでその範囲を広げている（図 5 参照）。
- 5 江戸時代の松前藩政下における家臣の知行形態である場（場所）知行制から発生した、蝦夷地特有の流通制度で 18 世紀初に北海道沿岸全域に 85 場所が開設された（図 6 参照）。
- 6 『江差町史』（P362）によると、18 世紀、松前藩下で繁栄するのは、福山・江差・箱館の三港であり、それぞれ特殊性を持っている。江差は在郷商人団の拠点として、西在郷鯨漁業および西蝦夷地場所への出稼の拠点であった。松前藩の経済的繁栄は鯨漁業と樺材について他二港を凌駕し、松前藩第一の経済的繁栄を見るとある。
- 7 日本海側の例として留萌管内増毛を例にすると、17 世紀に松前藩によってすでにマシケ場所が開設されるが、和人の立ち入りは許可されず、その後鯨漁の不漁から追鯨（鯨を追って西蝦夷地に入ること）が認められ、さらに 1840 年に「増毛以北の出稼入地許可となり、当地を基に南部、津軽、福山、江差の漁民続々来る」『増毛町史』（P1303）とある。引用文中、「入地」とは、蝦夷地に入ることという。また、出稼で入ることを「入稼」という。
- 8 『枝幸町史』（P182～P186）によると、18 世紀末に宗谷場所が分かれて斜里場所が創設されると、長い間、未開地帯として残されてきた宗谷と根室の間に和人の支配勢力が沿岸一帯にいきわたり、漁法の改善による大規模な漁業へと発展した。斜里までの航路が開けて寄港地となる沿岸各地の開発を促し、商業資本と経営規模の拡大につれて販路も拡張され、そのためさらに多くの漁獲物を必要とするようになり、また保存のための水産加工が進歩したとある。
- 9 元弘 4 年（1334 年）、僧玄恵が書いた『庭訓往来』の中に諸国の名産として蝦夷地の「宇賀昆布・鮭」（宇賀・小安村ウシカ川付近）が記されている。また、玄恵は当時、流行しだした芸能・



狂言の台本「昆布売り」を書いており、昆布が一般に食されていたこと、その流通が蝦夷地から日本海を経て若狭・小浜を経由していたことがわかる。

- 10, 11 19 世紀初めより東蝦夷地を直轄とした江戸幕府は、東蝦夷地における場所請負人制度を廃止し、幕府直捌制度により公正な取引をし、信用及び利益の拡大を図った。『北海道漁業史』によると、19 世紀には、漁業の発展による本州からの移民の増加とともに、商業活動が活発化することで一層の海産物の需要が高まり、それが東蝦夷地（太平洋側）の昆布漁の急激な隆盛をもたらした。その結果、東蝦夷地（内浦湾、胆振沿岸、日高、十勝、釧根地方等）の各場所産額は、場所請負制度が残る西蝦夷地にはほぼ匹敵する程度になったという。それらの産物は、函館に送られ、そこから、江戸や関西を始め、本州に送られたのである。また、道東では渡島半島からも多くの漁業従事者の移住者を集め、方言の伝播をもたらすことにもなったのである（例えば、北海道開発局局長官房開発調査課（1958）P17 によると、明治 16 年の記録では根室への道内からの移民は 88.7% が道南漁民によって占められていると記されている）。

<参考文献>

- 江差町史編纂室（1982）『江差町史 第五巻通説一』江差町
榎本守恵（1981）『北海道の歴史』北海道新聞社
枝幸町編（1967）『枝幸町史』枝幸町編纂委員会
布施 正（1962）『釧路漁業発達史』釧路叢書
北海道開発局局長官房開発調査課（1958）「道南漁村の構造と変遷（その社会史的考察を中心として）」北海道総合開発計画調書道南地域開発計画調査資料
北海道水産部漁業調整課（1957）『北海道漁業史』北海道
石垣福雄（1982）「北海道沿岸部の方言」『講座方言学 4 北海道東北地方の方言』図書刊行会
———（1983）『北海道方言辞典』北海道新聞社
増毛町史編纂委員会（1974）『増毛町史』増毛町役場
鈴江英一（1983）「和人地における村の成立」『北海道の研究 3 近世編I』清文堂
関 秀志（1983）「移民と地域社会の成立」『北海道の研究 5 近・現代編I』清文堂
但馬英知（2009）「水産業および渡海を伴う交易からみた北海道道南漁業集落郡の史的形成の構造」『沿岸域学会誌』Vol.21No.4
浦河町史編纂委員会（1971）『浦河町史上・下』浦河町役場